

日本語における直接受身文の研究：中国語との対応 関係を中心に

梅, 佳

<https://doi.org/10.15017/1654604>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	梅 佳			
論 文 名	日本語における直接受身文の研究 —中国語との対応関係を中心に—			
論文調査委員	主 査	九州大学	教 授	松村 瑞子
	副 査	九州大学	教 授	山村 ひろみ
	副 査	九州大学	准教授	西山 猛
	副 査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副 査	名古屋大学	教 授	杉村 泰

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、中国語対訳文との対応関係を丹念に分析することで、日本語の直接受身文の特徴を明らかにした実証的研究である。日本語直接受身文のガ格名詞とニ格名詞の有情・非情、ガ格名詞またはニ格名詞の省略、主語と動作主マーカ―の選択、述語動詞の種類、被害の意味の有無等について、中国語と対照させることで、その特徴を明らかにした。

論文の構成は全8章に分かれる。

第1章では序論、本研究の背景、目的、意義及び全体的構成を紹介した。

第2章は先行研究の概観と本研究の位置づけである。日本語の受身文に関する研究、中国の“被動句”に関する研究およびその二つの受身表現の対照研究を概観した上で、先行研究の問題点及び本研究の位置づけを試みた。

第3章では、本研究の理論上の枠組みおよび研究方法について詳述した。まず、本研究が基盤とする理論を明らかにし、次に、本研究で使用した『中日対訳コーパス』に収録された作品の詳細およびデータ収集方法を述べた。

第4章では、収集した日本語直接受身文及びその中国語対訳文について、受身文のガ格名詞とニ格名詞、述語動詞、文の意味特徴という三つの方面から対照分析を行い、各パターンの中国語表現と対応している日本語受身文の特徴を明らかにした。先ず、中国語の能動文と対応する日本語直接受身文は、述語動詞としては他動性の低い動作動詞か、内容に言及する言語活動動詞か、抽象的な物を生産する生産動詞である。また、文の意味特徴から見ると、能動文に訳された直接受身文は、受益、中立の意味を表している。一方、中国語の「被構文」と対応した日本語直接受身文は、他動性が高く、対象を変化させる一般動作動詞を述語動詞とするものである。最後に、中国語の意味上の受身文に訳された直接受身文は、ガ格名詞がすべて非情物であり、文の多くが「中立的」意味を表わすという特徴を持っている。

第5章では、視点の置かれる位置、またその転換から受身文における主語の選択に関して考察を行った。日本語の受身文における主語は「視点」の配置序列に厳密に従うが、中国語は「視点」の配置序列だけには制限されない。また、日本語は「視点」の固定化を重視する言語である一方、中国語は、視点の固定化が日本語ほど厳しく要求されておらず、「視点」固定のために受身文を用いることも少ない。さらに、日本語の場合は、事態を主観的に把握する傾向があるのに対し、中国語の場合は客体化して表現する傾向がある。一方、ニ格名詞の取る助詞「に」、「によって」、「から」それぞれを用いる日本語直接受身文と中国語の対応関係についての考察から、「によって」、「から」を使用している日本語直接受身文はよく中国語の能動文と対応していることが分かった。

第6章では、「アクションチェーン」、「プロトタイプ理論」により、受身文の述語動詞に関する考

察を行った。動作性或いは受動者への影響の強い動詞は受身文の述語動詞として用いられやすく、受動者に影響を与えない動詞は受身文の述語動詞として用いられることが少ないことは日本語も中国語も同様であるが、次の様な相違点が明らかになった。まず、抽象的な生産の意味を表わす動詞、放置、授受の意味を表わす位置変化動詞は中国語受身文の述語動詞としては用いられない。具体的な生産の意味を表わす動詞、受動者が非情物の移動動詞は中国語受身文の述語動詞として用いられるが、「被」などの受身マーカ―を持つ典型的な受身文ではなく、「意味上の受身文」として成立している。さらに、状態心理動詞はめったに中国語受身文には用いられない。また、両言語とも動詞の他動性が強ければ強いほど受身文になりやすいが、述語動詞にアスペクト助詞や結果状態を表す補語が付加されやすいのは、中国語受身文の特徴である。

第7章では、日中直接受身文の意味特徴についての考察を行った。日中受身文はともに「被害と迷惑」「受益」「中立」などの意味を表わすことができるが、中国語で受身文となるのは「被害」の意味を表わすものが一般的である。また、「動作主への称揚と動作主への批判」の意味を表わす文が少なくないのも中国語受身文の意味上の特色と言える。

最後の第8章では、第4～7章で考察した内容をまとめた上で、今後の課題について述べた。

日本語受身文を研究した先行研究は多いが、中国における日本語教育現場に成果を還元することができる研究は数少ない。本研究は、言語教育への実用化に向けて日中対照分析を行った数少ない実証的研究であり、その成果は日中両言語の翻訳や日本語教育に応用することができる。さらに、この研究を発展させれば、日本語と中国語の事態認識の相違を解明することに繋がると期待できる。よって、論文審査委員会は、本論文を博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。